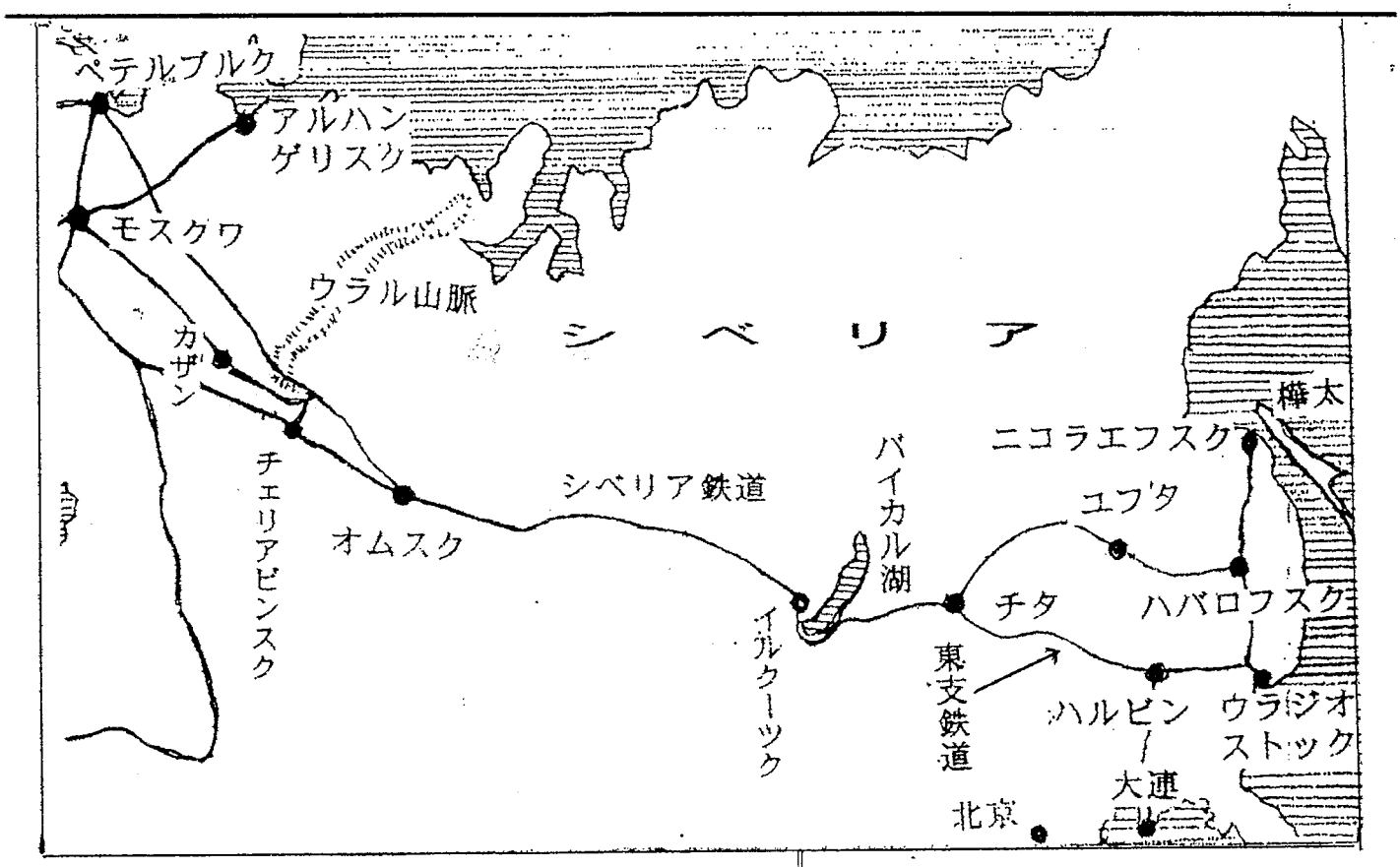
「シベリア出兵と寺内正毅内閣」メモ



●シベリア出兵から、日本は「おかしな国」になった

▽ロシア革命で混乱する ウラジオストックに
　出兵したのは 大正7年8月 撤兵は11年10月

▽最大で7万3千 延べ24万の将兵が 送られ
　戦死5千 負傷者2千 戦費9億円（国家予算のほぼ1年分）

▽得たものは 国内の「無名の師」の批判
　「シベリアに野心を持つ日本」国際的な不信感

●何で、こんなことになったのか？

▽日本に しつこいほど 出兵を要請したのは英仏
　「日米共同で出兵しよう」
　米国の提案があって 初めて 実現した出兵

▽各国 それぞれ 思惑があったのに
　日本だけが悪者に 日本は 引き際を誤った

▽シベリアは 日本のそば 地理的環境が
　革命に対する怯え 同時に 陸軍の野心も

▽各国軍隊が 引き揚げた後も ズルズル居座り
　泥沼に 足を突っ込む結果に なってしまった

●シベリア出兵を強行したのは寺内正毅内閣

司馬遼太郎さんの言葉

「日本がましな国だったのは、日露戦争までだった。あとは ― とくに大正七年のシベリア出兵からは ― キツネに酒を飲ませて馬に乗せたような国になり、太平洋戦争の敗戦でキツネの幻想は消えた」

寺内　正毅（てらうち・まさたけ）

嘉永5（1852）～大正8（1919）　長州藩出身。陸軍大将・元帥。西南戦争で右手に負傷し、以後軍政面を歩む。教育総監、陸大校長などを経て明治35年桂内閣陸相、在任9年半。43年韓国を併合すると、陸相のまま初代朝鮮総督となり武断統治を行なった。大正5年首相に就任しシベリア出兵を強行、米騒動で総辞職に追い込まれる。長男寿一（太平洋戦争の南方軍総司令官）も陸軍大将・元帥

▽大正5年10月 大隈重信に代わり 首相に

新聞は「ビリケン首相」

寺内は禿げていて頭の先が尖っている。当時アメリカから輸入されて人気のあった福の神人形「ビリケン」そっくりだというので、からかい半分もあったが、それ以上に「政党政治や国民の声を無視した内閣」の反発が強かった。新聞はビリケンに「非立憲」の3文字を充てて、非難、攻撃をした。

▽元老山県有朋は 大隈内閣外相

加藤高明(立憲同志会総裁)に 大きな不満

第1次大戦に 元老の意見も聞かずに 対独宣戦

中国に「21ヵ条要求」 反日運動に 火を点ける

▽大隈は 後継に「加藤推薦」 異例の辞表を提出

「…伏シテ思フニ子爵加藤高明ハ練達堪能ノ士ニシテ永ク世ノ重望ヲ負フ、伏シテ冀クハ陛下愛憐ヲ垂レサセラレ、臣カ後継トシテ高明ヲ抜擢セラレムコトヲ」

▽山県は 元老会議で

「世界大戦中の重要な時期だから、挙国一致内閣が必要だ。それには一党の党首を首相にするのは望ましくない」 寺内推薦を決めた

●長州閥では、桂太郎以来3年半ぶりの首相

「長州の陸軍」

寺内が明治35年陸相になった時、前任の児玉源太郎は「寺内は、自分のように盲判を捺す奴ではない。書類の第1頁から終わりまで目を通した後でなければ、決して判を捺さない」

「規則が軍服を着ている」といわれたくらい、規則・法令に喧しく、細かなことにも一々口出しした。陸相在任9年半、「長州でなければ陸軍は勤まらない」の長州全盛時代が続いた。

武断統治で「朝鮮王」

明治43年8月、初代朝鮮総督になった寺内は、全道に憲兵隊を置き辺地にも憲兵の駐在所を設けて、憲兵による監視網を張り巡らせた。

鵜崎鷺城は「朝鮮において独り得意なる者は

大隈 重信(おおくま・しげのぶ)

天保9(1838)～大正11(1922) 肥前佐賀藩出身。明治3年参議、6年大蔵卿となるが、「14年の政変」で免官。翌年立憲改進党総理となり東京専門学校(現早大)創立。21年外相。条約改正交渉中、爆弾を投げられ右足を失う。31年憲政党を結成、初の政党内閣を組織するも4か月で辞職。大正3年第2次内閣を組織、第1次大戦で対独宣戦布告、中国に「21ヵ条要求」

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり軍制の確立、徴兵令制定に当たる。11年参謀本部長。22年年首相。枢密院議長を経て31年第2次内閣を組織、軍部大臣現役武官制実施。日露戦争で参謀総長。元老、長州閥総帥、陸軍の大御所として政界、陸軍に君臨した

加藤 高明(かとう・たかあき)

万延1(1860)～大正15(1926) 愛知県生まれ。岩崎弥太郎(三菱)の女婿。明治33年伊藤内閣外相。第1次西園寺内閣外相を経て駐英大使。 大正2年第3次桂内閣外相。立憲同志会総裁となり3年大隈内閣外相。5年憲政会総裁。13年首相に就任、普通選挙法、治安維持法を制定した

「21ヵ条要求」

第1次大戦で日本は中国山東半島の独租借地・青島を占領したが、中国の撤兵要求に対し大隈内閣が突き付けた要求。最大の眼目は旅順の租借権、満鉄の権利の99年延長だったが、「あれもれも」と出した要求が21になり、中国は受諾した大正4年5月9日を「国恥記念日」と名付け、反日運動が中国全土に広がるきっかけとなった。

寺内および腹心の股肱にして、不平ならざるは十三道の山と森と川とあるのみ」

大阪朝日編集局長・鳥居素川が京城で寺内に面会を求めた時。総督室隣の小部屋に通され、椅子で待っていると、副官が来て「総督がお会いになる」立って総督室に入ろうとすると副官が押し止め「入るには及ばない。そこで引見する」反骨で鳴る鳥居は「何を言うか。こんな所で話が出来るか」椅子を引きずって寺内の前にドンと置き、朝鮮統治の失敗を叩いた。

●言論界は、挙って大反対

東京朝日社説（大正5年10月7日）

元老が衆議院における勢力を全然無視し、寺内伯をして超然内閣を組織せしめんとするの可否は、寺内加藤の比較問題にあらずして、純然たる憲法問題なり。一国の政治が国民の希望により行はるるや否やの問題なり、国民の参政権が実行せらるるや否やの問題なり。

▽10月12日には 全国記者大会が開かれ
「閥族官僚政治排斥」を 決議した
▽対する寺内は 警視庁巡査6千人を 1万人に増員
民衆運動を抑え 新聞には 厳しい言論統制で

●どの政党代表者も含まない「超然内閣」を組織
▽山県は 立憲同志会から 閣僚を入れ
同志会を与党にするよう 勧めたが
「閣僚は自分の自由裁量に委せて頂きたい」
▽加藤の同志会は 当然 反対派に回り
小会派を合同 「憲政会」(200議席)の大勢力に
▽ただ 寺内にとって 救いは
原敬の政友会が 好意的な 中立方針
「是はこれを賛し、非はこれを斥け」

現実主義者原のしたたかな計算

「是々非々」が政界用語になるのは、ここに始まると言われるが、政友会は総選挙(大正4年3月25日)で202議席から108議席と惨敗したばかりだった。原が宿敵・長州の寺内内閣に敢えて与党

桂　太郎（かつら・たろう）
弘化4(1847)～大正2(1913)　長州藩出身。陸軍大将。台湾総督、陸相歴任。明治34年首相となり、日英同を盟締結し、日露戦争遂行。43年2次内閣で韓国併合。内大臣兼侍従長を経て大正1年第3次内閣を組織したが護憲運動で53日で辞職

児玉　源太郎（こだま・げんたろう）
嘉永5(1852)～明治39(1906)　周防徳山藩出身。陸軍大将。台湾総督を経て明治33年陸相。36年参謀次長が急死、後任となり、日露戦争の陸軍作戦を担当、満州軍総参謀長として出征。39年参謀総長

鵜崎　鷺城（うざき・ろじょう）
明治6(1873)～昭和9(1934)兵庫県生まれ。本名又吉。東京日日記者として活躍し、中央公論に「朝野の五大閥」「薩の海軍・長の陸軍」を発表、軍閥・財閥批判を展開した。著に「犬養毅伝」

鳥居　素川（とりい・そせん）
慶応3(1867)～昭和3(1928)熊本県生まれ。本名赫雄(てるお)。明治30年大阪朝日に入社。大正初年、編集局長として健筆を揮ったが、7年の白虹事件で退社

超然内閣

明治18年初代首相伊藤博文が「政府は政党の動きに左右されず、超然として独自の政策を進める」とした政治方針。

伊藤　博文（いとう・ひろぶみ）
天保12(1841)～明治42(1909)長州藩出身。内閣制度、憲法制定など国家体制を整備。明治18年初代首相となり4次の内閣を組織。枢密院議長3度。33年立憲政友会を創設し総裁。38年韓国統監。ハルビンで安重根(韓人)に暗殺される

寄りの姿勢を見せたのは、政府予算を利用し、道路や学校を作って、政友会再建の思いから。

●厳しい政治情勢に、臨時外交調査会設置(大正6年6月6日)

寺内の狙いは…

世界大戦の激動期に、外交に関する国論を統一する必要があるとして、天皇直属の最高審議機関とした。寺内が総裁、本野一郎外相が幹事長となり、委員は、政府側から内相後藤新平と陸海相、枢密院から牧野伸顕ら顧問官3人に政友会総裁原、国民党総理犬養毅と計10人。

政党を実質的に取り込み、議会の制約をなし崩しにする狙いだったが、憲政会は加藤が「寺内内閣の外交に責任を持つわけにはいかぬ」と参加を拒否した。加藤の持論は「外務省を中核とした外交一元化」だったが、それ以上に山県、それにつながる寺内に対する反感から。

●ロシア革命で、シベリアが世界の関心の的に

▽大戦は 大正7年11月 ドイツ降伏で終わるが
帝政ロシアが それまで 持ちこたえていたら
シベリア出兵は なかったろう

「二月革命」

日露戦争に敗れたロシア国内は、政情不安に大きく揺れた。労働者、農民の協議会(ソビエト)が各地に作られ、デモやストが頻発した。

そこへ大戦の重荷が加わった。連合国には日本など21ヵ国が参加、戦いは英仏が西部戦線、ロシアが東部戦線を担当し独墺を包囲する形で進められたが、戦争長期化の消耗戦の中、特にロシアは深刻だった。動員兵力1,200万のうち、戦死、戦傷、捕虜など950万、損害率76.3%。農家の働き手は戦場に駆り出され食糧生産は著しく低下、都会は食糧難に見舞われた。

6年3月8日(露暦では2月23日)、首都ペテルブルクで「パンを寄越せ」と婦人労働者がデモ、翌日には130余工場で20万人がストに突入、市内は全くマヒ状態。労働者・兵士の労兵ソビエトが結

原　敬(はら・たかし)

安政3(1856)～大正10(1921) 盛岡南部藩出身。新聞記者を経て外務省に入り、通商局長、次官。大阪毎日新聞社長となり、明治33年政友会創立に参加、幹事長を務めた。35年衆院議員に当選し逓相、内相を歴任。大正2年第3代政友会総裁。7年米騒動で寺内内閣が倒れると、日本で最初の純政党内閣を組織し、「平民宰相」と世論の支持を受けたが、東京駅で暗殺される。著に全82冊の「原敬日記」

本野　一郎(もとの・いちろう)

文久2(1862)～大正7(1918)肥前佐賀藩出身。渡仏しリヨン大に学び、帰国後外務省に入る。ベルギー、フランス公使を経て明治40年ロシア大使。大正5年寺内内閣外相となるが胃癌で辞職。この間、明治43年から読売新聞社主を務めた

後藤　新平(ごとう・しんぺい)

安政4(1857)～昭和4(1929)陸奥水沢藩出身。内務省衛生局長、台湾総督府民政長官を歴任、明治39年満鉄総裁。桂内閣逓相を経て大正5年寺内内閣内相、本野辞任で7年外相。東京市長を経て12年山本内閣内相となり関東大震災後の帝都復興計画立案。この間、少年団連盟総裁

牧野　伸顕(まきの・のぶあき)

文久1(1861)～昭和24(1949) 鹿児島生まれ。大久保利通の次男。公使、文相を歴任し明治42年枢密顧問官。大正2年山本内閣外相。10年宮内相。14年内大臣となり、二・二六事件で襲撃されたが難を逃れる。戦後の首相吉田茂は女婿

犬養　毅(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932)岡山県生まれ。第1回総選挙以来、連続当選18回。明治31年大隈内閣文相。国民党総理、革新

成され、鎮圧出動拒否の軍隊も出てきた。
3月15日、リベラル派が臨時政府を樹立、17日にはニコライ二世が退位、300年続いたロマノフ王朝はあっという間に崩壊した。

●米国は3月22日、臨時政府を真っ先に承認
▽3億2,500万ドルの経済援助を 申し出ると
4月6日には ドイツに宣戦布告
▽米国参戦は 連合国を 勇気づけたし
臨時政府も 戦争継続を 約束していたが…

●臨時政府は、俄造りの「寄せ集め政権」
▽ペテルブルクでは
ボルシェビキ指導の 労兵ソビエトと
臨時政府との 二重支配 主導権争い
▽臨時政府は 東部戦線で 7月攻勢
戦場から 脱走の兵士続出 失敗に終わった

「十月革命」
ボルシェビキのスローガン、「土地を農民へ、平和を全世界に」が民心を大きく揺さ振った。6年11月7日、レーニンの指導で武装蜂起、臨時政府を打倒すると、ソビエト政権樹立を宣言、世界最初の社会主義国家建設へ。

●レーニンは8日、世界に「無併合・無賠償」即時講和を
▽連合国に「東部戦線崩壊」のショック
ドイツは 全軍を 西部戦線に集中出来る
▽ソビエト政府 11月26日 ドイツに休戦申し入れ
連合国は 翌日パリで 最高戦争指導会議
▽フォッシュ元帥(仏代表)は ロシア軍事干渉を提案
東部戦線を 再構築しようというのだ
▽無傷の軍事力 生産力を持つ日米に 熱い期待
フォッシュは 日米両軍による
モスクワーウラジオ間の
シベリア鉄道占領案まで 持ち出した
▽日米委員は反対「軍事介入はロシアに対し戦闘するに等しく、逆にドイツに口実を与え、ロシアを我々に反対する態度をとらせる恐れがある」

倶楽部リーダーとして、護憲・普選運動を推進し、「憲政の神様」と称された。昭和4年政友会総裁。6年首相。満州事変後に対処したが、五・一五事件で暗殺

ニコライ二世(Nikolai)
1868～1918 帝政ロシア最後の皇帝。明治24年皇太子として訪日中、大津で1巡査に斬られ負傷。27年即位。極東に積極政策を展開、日露戦争に敗れて革命に。シベリアで家族と共に銃殺される

ボルシェビキ
多数派の意味で、社会民主労働党の極左派。レーニンを指導者として、メンシェビキ(少数派)と対立、二月革命後の臨時政府を支持せず、十月革命を起こし、ソビエト政権を樹立。ロシア共産党、ソ連邦成立後はソビエト共産党と改称。

レーニン(Vladimir Lenin)
1870～1924 ロシアのマルクス主義者。学生時代より革命運動に従事、流刑・亡命生活を経て革命に成功、ソビエト政府首班として社会主義国家建設を指導

フォッシュ(Ferdinand Foch)
1851～1929 フランス陸軍元帥、参謀総長。第1次大戦で連合軍総司令官として指揮をとり、連合国を勝利に導く

コースは三つ考えられた
①北方、アルハンゲリスクから南下する ②南方、黒海からコーカサスに沿って北上する ③東方、ウラジオストックからシベリア鉄道に沿って連合軍を西に進める。
北方も南方も、英仏は西部戦線に手一杯、新軍事作戦の余力はなかった。

●本野外相は、12月末の外交調査会に「万一に備え東部シベリア出兵準備」の意見書
▽ハルビン ウラジオ総領事から
居留民保護の出兵要請が 相次いでいた
松井慶四郎駐仏大使も「パリの連合国会議ではロシアの穏健分子を維持したいといった空気が流れている」と 報告してきた
▽原敬は 真っ向から反対「連合国から要請があったというだけで出兵すべきでない。これが端緒で大戦になるの覚悟がなくては、一兵卒といえども出すべきではない」寺内も同意したが…

●本野外相は、出兵に向けて動いた
▽7年2月5日 米国大使に「個人的見解」と断り
出兵について 本国政府の意見を求め
英仏にも 駐在大使に 意向を打診させた
▽「日本の奮起を望む」賛成はフランスだけ
英国は 日本の単独出兵に 強い警戒感
米国は「出兵は不得策であり、米国が支持しているロシア革命の前途に支障を来す」と反対
▽外交調査会(3月9日)では 原の主張する
「対米重視、出兵せず」の方針が 確認された

●ソビエト政府は3月3日、対独単独講和条約に調印
▽内容は 英仏両国を 愕然とさせるものだった
・バルト海沿岸ロシア領の割譲・ウクライナからのロシア撤退・60億マルクの賠償支払い
▽独墺捕虜196万人が 再武装される恐れもあり
日米に 出兵を求める世論が 再燃してきた

●革命過激派の波も、徐々にシベリア全土へ
▽ウラジオでは 4月4日朝
日本人商店が襲われ 1人殺害1人が重傷
▽日英海軍は 陸戦隊を上陸させ 居留民保護に
▽5月2日には 過激派が ウラジオの全権を掌握
陸戦隊は「内政不干渉」の方針を 厳守した
▽この事件は 陸軍 対外強硬派に
出兵論を 強く 促すことになったが
言論機関は 目的の曖昧な軍事行動に
反対したし 与謝野晶子も「何故の出兵か」

松井 慶四郎(まつい・けいしろう)
慶応4(1868)～昭和21(1946) 大阪生まれ。明治22年外務省に入り大正2年外務次官。5年駐仏大使。13年清浦内閣外相。駐英大使を経て昭和13年枢密顧問官

まずウラジオへ日英陸戦隊
ウラジオには、連合国各国のロシア救援物資(鰊、鱒、鱈)66万2千トンが集積されていた。英国は7年1月1日、「物資防護のため香港から巡洋艦サフォークを派遣することにした」と、日本にも軍艦の共同派遣を求めてきた。
寺内は「けしからぬ。こうなれば、何でもかでも我が軍艦を先にウラジオに入れねばならぬ」 先陣争いの結果、軍艦石見(戦艦アリヨール13,156トン)が陸戦隊100人を乗せ一足早く12日入港、軍艦朝日(日露戦争の戦艦15,200トン)も派遣。

原の論理
日記に「日米間の緊密なると否とは殆ど我国将来の運命に関す」日本の行動基準を国益の観点から対米関係でとらえ、「米国が動かない限り日本は出兵すべきでない」とした。

与謝野 晶子(よさの・あきこ)
明治11(1878)～昭和17(1942)大阪堺生まれ。本名は志よう。明治33年来阪した鉄幹と知り合い、翌年家を捨てて上京、処女歌集「みだれ髪」を出版し鉄幹と結婚。「新訳源氏物語」全4巻を出版。教育・婦人・社会問題に関する著述も多く、文化学院創設に参加し、教鞭もとった

「何故の出兵か」
「日本人の上に今や一つの大問題が起っております。近頃の新聞を読む人の誰もが気が附く通り、それは西伯利亜(シベリア)へ日本の大兵を出すか

●参謀本部は、シベリアに親日的な傀儡政権を作ろうと、早くから動いていた

▽謀略工作の主役は 参謀次長田中義一中将

▽セミョーノフ(コサック大尉)が 7年1月2日 満州里で ザバイカル州に 反革命政権樹立のため 旗揚げ

▽荒木貞夫中佐(ロシア駐在武官)は セミョーノフに 武器援助を約束して帰国 田中の了解をとった

▽セミョーノフには 小銃5千丁 大砲 機関銃 軍隊指導のため 50人の将校・下士官が送られた

▽田中の持論は

「日本の国防には、日本海を日本の内庭にする」

▽中島正武少将(参謀本部第2部長)ら2人を シベリアに派遣

寺内は 中島に「もしロシア人が穏健な自治体を作り、ボルシェビキの対抗勢力となり得るなら、資金や武器の援助をしてもよい」

▽田中は 2月28日 軍事協同委員会を組織 出兵計画策定 反革命勢力支援に当たったが 閣議に意見書を提出「この天祐を逃せば 悔いを千載に残す」と 出兵を強く迫った

●山県有朋は、寺内に意見書を送り自重を促した

山県意見書(大正7年4月24日)

過日喧しかりしシベリア出兵については、自分は決して不賛成者に非ざるのみならず、あるいはその主張者というべきものなれども、およそ他国に対して戦争をせんとする者は、最終の勝利を期せざるべからず。しかるに、今日本がシベリアに出兵して、はたしてその目的を達し得るの成算ありや。…

日本がシベリアに出兵すれば、結局ドイツを相手どらざるべからず。されば次第によっては、戦線を拡張して、深く露国に侵入するの必要を感ずるの時あるべく、かくて大兵を遠方に送らんとすれば、文明戦争の利器たる飛行機、自動車、その他鉄砲、糧食の用意をなさざるべからず。たとえば現在にても米穀の不足を感じて、非常の高値を出しおるに、これが出兵などという場合となりて、はたして食物の供給に差し支えなきや」

出さないかという問題です。

…さて我国は何のために出兵するのでしょうか。英仏が我国に出兵を強要して、露西亜の反過激派を救援し、少なくも莫斯科(モスクワ)以東の地を独逸勢力の東漸から独立させたい希望のあることは明かですが、これは日本軍が自衛の範囲を越えて露西亜の護衛兵となるのですから、名義は立派なようでも断じて応じることの出来ない問題です。

…無意義な出兵のために、露人を初め米国から(後には英仏からも)日本の領土的野心を猜疑され、嫉視され、その上数年にわたって撤兵することが出来ずに、戦費のために再び莫大の負債を負い、戦後にわたって今に幾倍する国内の生活難を激成するならば、積極的自衛策どころか、かえって国民を自滅の危殆に陥らしめる結果となるでしょう。この理由から私は出兵に対してあくまで反対しようと思っております」3月17日「横浜貿易新報」

田中　義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929)　長州藩出身。陸軍大将。4年間ロシアに留学、日露戦争で満州軍参謀。明治44年軍務局長。増師を要求して陸相辞職で「大正政変」の因を作る。大正4年参謀次長となりシベリア出兵を強行。7年原内閣陸相に就任すると、一転して兵力削減に。14年政界に転じて政友会総裁。昭和2年首相に就任、山東出兵を行なう。張作霖爆殺事件の処理で天皇から叱責され辞職

セミョーノフ(Grigorii Semyonov)

1890～1946 コサック大尉。日本軍の支援のもとザバイカル州に反革命地方政権を樹立。戦後、満州で処刑された

●歴史の歯車を出兵へ向けて大きく動かしたのが、ロシア国内にいた5万人のチェコ軍団だった

▽独立運動指導者 マサリク ベネシュは
　パリに「チェコ国民協議会」を設置
　投降兵で チェコ軍団を作ると
　　東部戦線で ドイツ軍と 戦わせ
　　英仏から「大戦後独立」の約束を 取り付けた

▽ところが ソビエトの単独講和で
　軍団が ロシア国内に 孤立する結果となった

▽協議会は 軍団を フランス軍指揮下に入れ
　西部戦線で 戦わせることにした

▽問題は どうやって 輸送するか
　西に向かえば チェコは 目と鼻の先でも
　ドイツ軍が ひしめいており
　　北のアルハンゲリスクは
　　ドイツ潜水艦に狙われ 輸送船を回せない

▽そこで はるばる シベリア鉄道経由で
　いったん ウラジオに集結させ
　船で海路 ヨーロッパ戦線に 向かわせることに

●ソビエト政府も、「ウラジオ即時移動」を許可

▽スターリン(人民類)は 大正7年3月26日
　軍団を 60列車に分け 1列車1,000～700人
　　機関銃1丁 小銃160丁の携行を 認めた

▽軍団は 4月1日 キエフ(ウクライナ)を出発
　途中で 大砲 馬を置いて
　15日には 先頭の1,000人が ウラジオに到着

●ここから、事態は急転回した

チェコ軍東進がソビエト政府の不安に

シベリア各地で反革命の動きが活発だった。満州国境ではセミョーノフが攻勢に出ていてウラジオには日英陸戦隊。そこへ、チェコの大軍を送り込んだらどうなるか。チェコ軍が1ヵ所に集中しないよう、指令を出して、列車を停めたり、遅らせたりする措置をとった。

▽結果として
　シベリア大陸を 横断するように
　　チェコ軍団の長い帯が 出来てしまった

荒木　貞夫(あらき・さだお)

明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。第1次大戦中、ロシア軍従軍を武官を務め、ハルビン特務機関長、シベリア派遣軍参謀。昭和6年犬養内閣陸相。皇道派中心として統制派と対立。二・二六事件で予備役後に近衛・平沼内閣文相。東京裁判で終身禁固刑(29年獄)

チェコ軍団

第1次大戦が始まる前、チェコ・スロバキアという国はなくオーストリアの属領だった。ボヘミア王国として栄えたチェコ人、スロバキア人はスラブ民族。ゲルマン民族のオーストリア支配を嫌い、国外への移住者は100万を超えた。

大戦は彼らにとって祖国回復、独立の絶好のチャンスだった。対独戦に大勢の義勇兵が参加したし、東部戦線でオーストリア軍に動員された兵隊も大隊ごと、中隊ごとロシア軍に投降し、その数は5万人に達していた。

マサリク(Tomas Masaryk)

1850～1937 チェコ独立運動を指導、大正7年独立後の共和国初代大統領。国内の民主化、少数民族保護に尽くした

ベネシュ(Edvard Benes)

1884～1948 マサリクと独立運動指導、外相、首相を経て昭和10年に大統領。第2次大戦中、ロンドンで亡命政権を組織し、戦後、帰国後に再び大統領に就任

スターリン(Iosif V. Stalin)

1879～1953 グルジア生まれ。革命後民族人民委員を経て大正11年から共産党書記長。大量粛清で独裁体制を築き、昭和11年首相となり、対独抗戦を指導。死後、専制支配を批判された

チェリアビンスク事件

5月14日、駅で停車中のチェコ軍列車に、赤衛軍編入のため西へ向かうドイツ兵捕虜がストーブの蓋を投げ込み1人が負傷した。怒ったチェコ兵がドイツ兵を引きずり出し、射殺した。

▽チェコ軍は ソビエト政府の武装解除要求を拒否
　フランス陸軍も チェコ軍に
　「シベリア鉄道の現在位置を確保し、武器は引き渡すな」と命令 25日夜から 戦闘が始まった
▽チェコ軍は 優勢に戦い そのまま武力衝突の帯に
▽占領した都市では コサック 帝政派など
　反革命地方政権が 誕生していった
▽ウラジオには 1万4千人が到着していたが
　残り3分の2は まだ 移動中
　武器も わずかな 機関銃 小銃だけ
　大砲を持つ軍隊とぶつかれば 全滅の悲運に
▽連合国の間に「チェコ軍を見殺しにするな」
　英仏も 日米両国に 救援出兵を要請してきた
▽米国は 基本的に 軍事干渉に反対の立場
　日本も「出兵には米国の援助と要請が必要」
▽問題は 米国の決意に 絞られてきたが…

●米国は7月8日、日本政府に「日米共同出兵」を提案
▽外交調査会は 激論になった
▽後藤新平外相(樺太で4月23日就任)は「日米同数の兵力とか派遣先のウラジオ限定など、米国提案に日本は縛られる必要はない。シベリアにも出すべきだし、自主出兵しろ」寺内首相も 同意見
▽原敬 牧野伸顕は 日英米の提携を主張
　「とりあえず米国提案に同意し、その後の情勢を見て判断する」原は シベリア拡大にも反対
▽結局 17日 妥協案を 米国に回答
　「日本軍1万2千、情勢によっては
　ウラジオ以外にも派遣する場合がある」
▽ウィルソンは 一度は 出兵断念まで考えたが
　英国政府の要請で 渋々 同意した
▽日本は8月2日 米国は3日 シベリア出兵を宣言
▽英仏が描いていた ロシア軍事干渉の夢は
　「チェコ軍救援」の名目を得て 現実のものに

「赤衛軍」

ソビエト政府は、まだ正規軍を持っていなかった。労働者の武装部隊「赤衛軍」があったが、訓練装備は不十分で、これを正規軍にするため、目をつけたのがドイツ兵捕虜。シベリア各地に収容の13万人を「赤衛軍」に入れて中核にすると共に、その指導で「赤軍」創設にかかった。

米国がついに方針を変えた

フランスは6月に入ると高名な哲学者ベルグソンを団長とする使節団を米国に送り、マサリクも渡米し、米世論に訴えた。ウィルソン大統領は6月17日、国務長官に「チェコ人とロシア人は従兄弟の間柄だ」と洩らした。

同じスラブ民族だから、チェコ軍救援が目的ならロシア人の国民感情を傷つけることもないだろうと考えたのだ。ウラジオのチェコ軍が29日、ソビエト政権を打倒してウラジオの安全が確保されたことも、ウィルソンの心を動かしたようだ。

ウィルソン(Thomas Woodrow Wilson)
1856～1924 米国第28代大統領。革新的な政策を推進、第1次大戦で対独宣戦布告。民族自決・国際連盟創設など14ヵ条を提唱し、パリ講和会議に臨んだが、上院でベルサイユ講和条約の批准を得るのに失敗した。ノーベル平和賞受賞

米国提案の内容

一、チェコ軍救援のためウラジオに日米それぞれ7千の軍隊を派遣する
二、日本は武器弾薬をチェコ軍に供給し、米国はその費用を分担する
三、救援の目的が達成され次第直ちに撤兵、の日米共同宣言を出す

●掲げた目的こそ「チェコ軍救援」で一致していたが、思惑は各国様々、「呉越同舟」だった

▽浦潮派遣軍を編成(8月4日 軍司令官大谷喜久蔵大将)

12日に 第一陣第12師団(小倉)が ウラジオ上陸

▽ウラジオ一番乗りは 英軍だった

3日には 香港 シンガポールから 800人が到着

イルクーツク(バイカル湖西岸)を 目指して行った

▽仏軍も 9日 1,200人が到着した

英仏は 2日には アルハンゲリスクに陸戦隊

英仏の思惑は…

東部戦線崩壊で、自分たちの戦っている西部戦線への重圧を恐れた。ソビエト政府にも「承認」を条件に戦争を継続させようとしたが、単独講和で不可能になった。そこで、ソビエト政権に代わりドイツと戦うロシア人勢力を西シベリアに、新たに構築しようとしたのだ。

英仏軍が一路西を目指したのも、また日本に「出来るだけ西へ出てほしい」と言い続けたのも、西シベリアにその拠点を作るためだった。

▽米軍先遣隊1,200人は 16日 フィリピンから

共同出兵は最初からギクシャクした形で

米軍司令官グレーブス少将は、陸軍長官から「革命には一切干渉するな」と厳命され、「過激派、反革命派のどちらにも味方しない代わり、敵対視しない」の態度を取り続けた。日本や英仏軍は、事あらば過激派と一戦交える積もり。「アメリカは過激派の味方か」の声さえ出た。

各国軍隊は大谷の指揮下に入ったが、グレーブスは、日本軍隷属は拒否し、ヨーロッパ戦線同様の協力関係を希望した。

●陸軍の本音、「傀儡政権」は参謀総長指示に

▽「戦闘員1万2千」も 外向けの話 もっと増員する

▽参謀総長上原勇作大将は 米国の出兵提案に

7月12日 政府に意見書「派兵の手段、方法は、用兵上の見地から決定すべきである」

▽寺内首相は 出兵が決まった後は

政治的・外交的配慮より「統帥権」を優先させた

大谷 喜久蔵(おおたに・きくぞう)

安政2(1855)～大正12(1923) 福井県生まれ。陸軍大将。第1次大戦で青島守備軍司令官。7年シベリア出兵で浦潮派遣軍司令官となり、8年教育総監

浦潮派遣軍に対する奉勅命令

「チェコ軍ヲ救援スル為帝国軍ノ一部ヲ先ツ沿海州ニ派遣ス」

参謀本部は浦潮派遣軍に

参謀総長指示「帝国政府ハ…漸次有力分子ヲ融合妥協セシメ、以テ地方民意ヲ代表スル政治機関ヲ組織セシムルノ意図ヲ有ス」(大正7年8月5日)

参謀次長通報「第一梯団トシテ差遣セシ兵力ハ外部ニ対シテハ戦闘員一万二千ト称シアリ」

上原 勇作(うえはら・ゆうさく)

安政3(1856)～昭和8(1933)宮崎県都城生まれ。陸軍大将・元帥。日露戦争で第4軍参謀長。旭川、宇都宮師団長を経て明治45年西園寺内閣陸相。2個師団増設を要求して辞職、「大正政変」の因を作る。大正3年教育総監、4年参謀総長。薩摩閥の長老として山県没後の陸軍重鎮となり、田中義一と対立、派閥抗争を招く

「統帥権」

統帥とは軍隊を指揮命令すること。明治憲法第11条に「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」とあり、天皇の大権として政府・議会から独立したものとされた。

日清・日露戦争の時には、元老、首相や外相が大本営の御前会議に出席、軍事と外交の調和を図ったから、「統帥権」という言葉はあっても、それが暴走するようなことはなかった。

●軍部暴走は、シベリア出兵が始まりだった
▽米国に 約束した「1万2千」は 外交調査会にも
一切 相談なしに 破られていった
▽8月5日 満州駐屯の2千が
居留民保護を名目に 満州里に派遣され
6日 国境を越えて チタ(シベリア・東支鉄道合流点)に進出
▽23日には 第3師団(名古屋)の
ザバイカル方面派遣を決定 米国に通告した
▽石井菊次郎駐米大使は ランシング国務長官に
死傷者続出 止むを得ないことを 説明したが
外務省に「本使ヨリ百方話シ掛ケタルモ国務卿ハ沈黙、答弁ヲ避ケタリ」と 報告している
▽7万3千に拡大 東部シベリアを 席捲していった

●シベリア出兵の間口を広げに広げたところで、寺内内閣を襲ったのが「米騒動」の嵐だった
▽新聞も世論も 出兵問題で騒然としている時
▽新聞紙面の大半は「出兵反対」で埋まり
7月30日付の新聞は 全国で 50余が発売禁止
「言論擁護・内閣弾劾」記者大会が 全国各地で
▽「おかみさんたちの騒ぎ」に
注目したのが 大阪朝日 大阪毎日

大阪毎日(大正7年8月5日)
「女房一揆起る 怖しい米価騰貴の影響
出稼漁夫の女房連百七、八十名」

▽東京 大阪から 新聞記者が 高岡に乗り込み
「高岡電話」(高岡から電話で送った記事のこと)で
「越中女一揆」の見出しが 全国を 駆け巡った
▽名古屋 京都 大阪 神戸 東京へと
大都市にも 同時多発の形で 広がっていった

大阪朝日は13日から「米の問題」欄
米騒動の記事や投書を大々的に扱った。歌人の調査部長・花田大五郎は、鳥居編集局長から「どうだ、歌で寺内内閣を批判してみないか」夕刊コラムに連日批判の歌を掲載した。「国民を飢に泣かせてすべ知らぬ 鈍(おど)の大臣(おとど)を罷めし玉へ」「シベリアに出さん兵われ知らず この米の値をかにかくにせよ」

石井 菊次郎(いしい・きくじろう)
慶応2(1866)～昭和20(1945) 千葉県生まれ。明治41年外務次官。駐仏大使を経て大正4年大隈内閣外相。6年駐米大使。9年再び駐仏大使となり昭和4年枢密顧問官。空襲で行方不明となる

発端は井戸端会議
7月22日夜、富山県魚津町(現魚津市)で、漁師の主婦が話し合っていた。「何でこんなに米が高くなって生活が苦しいのだろう」春から不漁続きで亭主が出稼ぎに行った樺太、北海道も不漁、仕送りが途絶えていた。しかも米価は1月に小売値1升30銭前後だったのが、7月に40銭~50銭近くに暴騰していた。
「地元の米がよそへ出て米不足になっている。それが値段を釣り上げている」彼女たちは日銭稼ぎに魚津港で北海道への米の船積み作業をしていて、「とにかく積み出しを止めさせよう」と、翌朝60人ほどが海岸に集まった。まず「町役場に陳情しよう」となって、途中で警官に見つかり、解散させられたが、騒ぎはたちまち近隣の漁師町に伝わった。
8月3日に西水橋町(現富山市)、4日には東水橋町で女性6、700人が隊列を組み、町長、町議の家に押し掛けて窮状を訴え、「米の安売りをしろ」と米屋を次々と襲った。5日には滑川町(現滑川市)で、「かあさんども、出んか、出んか」の掛け声で2千人を超す大集団が米屋に押し掛けた。
群衆は日を逐うごとに増加し、騒ぎは富山市、高岡市にも広がっていった。

大阪では
8月11日夜、天王寺公会堂で「米価調節市民大会」が開かれ、溢れた群衆が米屋に押し掛け、1升50銭を半値の25銭にまけさせた。深夜の午前1時過ぎだというのに、近隣の主婦200人ほど

●寺内内閣も、最初は宥和的な対策をとっていた

▽水野錬太郎内相は 11日 各府県知事に
「同情すべき点がある」と 寛大な処置を指示

▽ところが 米騒動が 大都市にまで広がると
7万5千の軍隊を投入 徹底した弾圧策に転じた

▽14日夜 米騒動の一切の記事掲載を 禁止した

大阪朝日は、紙面の下半分空白で発行

鉛版から、大急ぎで米騒動記事を削り取った跡も生々しく、トップに異例の大見出しで「寺内内閣は斯の如き理由の下に各地の米騒擾に関する一切の記事掲載を禁止せり」そして大阪府警察部通達を掲載した。

「米に関する各地騒擾記事は当分の内一切新聞紙に掲載せざるやう其筋より通牒有之候に付御注意相成度若し掲載せらるゝ時は発売頒布禁止処分可相成候右及警告候也」

●新聞報道は権力で止めることが出来ても、生活の不満は止められなかった

庶民の生活は苦しかった

大戦で日本は空前の軍需景気に沸いた。大正4年7億円余だった政府の財政収入は、7年には2倍以上の15億円。工業界は未曾有の活況を呈し「俄成金」を輩出した。職工も103万人弱から150万人に増え、「職工成金」の言葉が生まれたが、物価も2倍になっていた。給料アップは1.5倍ほど、とても物価騰貴に追い付けなかった。

「おれ達の生活をどうしてくれる」と、米騒動は戦前最大の民衆運動に発展した。

▽全国368市町村で「100万人参加」と 言われる

寺内内閣の衝撃

厳罰主義で臨み検挙2万5千人、起訴7,776人。一審で懲役10年以上の重刑が74人。うち死刑2人、無期懲役12人。しかも起訴の1割878人は部落出身、死刑の2人も部落民で、寺内内閣は「米騒動を部落民による煽動だ」として、失政批判に対する矛先をそらそうとした。

が手に手にバケツ、お櫃、風呂敷を持って駆け付けた。翌日には暴動化し、値引きに応じなかった米屋が叩き壊され、焼き払われ、軍隊が出動した。

神戸では12日、商社の鈴木商店が放火されたが、米の買い占めで「米価暴騰の元凶」と恨まれたのだ。

花田　大五郎（はなだ・だいごろう）

明治15(1882)～昭和42(1967)福岡県生まれ。大阪朝日に入社、調査部長の時白虹事件で退社。読売論説委員。戦後は大分大学学長、別府大学学長。歌人としても有名で号は比露史（ひろし）

水野　錬太郎（みずの・れんたろう）

慶応4(1868)～昭和24(1949) 東京生まれ。内務省局長、次官を歴任後、大正7年寺内内閣内相となり加藤(友)・清浦内閣でも内相。田中内閣で文相を務めた

「晶子女史は窮民ではない」

読売新聞に載った記事の見出し。東京では生活困窮者に白米廉売券を配布したが、与謝野晶子は子供が11人。「夫婦共に定収入がなく苦しい」と麹町区役所に券を請求したが、「調査に参りますと大きな玄関の門構えで、女中さんが取次に出てくるようではとても窮民と認められません」と、区役所は断っている。

「動乱はかまどより」（讀賣）

「台所よりする圧迫は実に恐ろしい。自由に対する圧迫は、忍耐すれば生命にだけは別状ないが、台所より来る圧迫は忍耐の余地がない。将に来らんとする動乱は必ず台所より来る。…二十世紀以後に革命ありとせば、それは必ずや台所より来る」(8月6日)

●「白虹事件」が、新聞界を揺るがす大事件に

▽記事掲載禁止問題は 新聞記者の
「寺内内閣打倒・言論擁護運動」へ 発展した

▽大阪では 8月25日 関西新聞通信社大会

大阪朝日は報道記事に「白虹日を貫けり」

「元帥陸軍大将従二位勲一等伯爵寺内正毅閣下など、厳しい金モールの光を以て国民を幻惑し得る時代は夙に過ぎ去った。沐猴の冠に誰が尊敬を払ひ得るか。国民は塗炭に苦しんでゐる。空倉の雀は飢に泣いてゐる」

沐猴（もっこう）の冠＝沐猴は猿のことで、猿が王冠をかぶっているように、所詮、首相にはふさわしくない人物のたとえ

「金甌無欠の誇りを持った我大日本帝国は今や恐ろしい最後の裁判（さばき）の日に近づいてゐるのではなからうか、『白虹日を貫けり』と昔の人が呟いた不吉な兆が黙々として肉叉（フォーク）を動かしてゐる人々の頭に電（いなずま）のように閃く」

金甌無欠＝傷一つない甕のように、独立強国で外国の侵略を受けたことのないこと

▽寺内内閣は「白虹貫日」に 飛び付いた

「白虹貫日」

「史記」（中国の史書）に出てくる言葉。白虹は兵、それが日、太陽（君主）を貫くということで、中国では「兵乱の前兆」、不吉の兆とされてきた。

▽編集発行人と 執筆した大西利夫記者を
朝憲紊乱 新聞紙法違反で告訴（2人には禁錮2月の判決）

▽10月14日 村山竜平社長が 責任をとり辞任
翌日には 鳥居編集局長 花田調査部長
長谷川如是閑 大山郁夫 丸山幹治が 一斉退社

●寺内は9月21日、病気を理由に内閣総辞職

▽山県も 完全に見限っていた 側近の松本剛吉に
「此の模様で押行く時は迚も寺内に遣らして置く訳には行かぬ。改造のことなども色々注意したけれども、寺内は更に聴き入れない」

▽山県意中の人は 西園寺公望だったが
辞退され 原敬内閣に踏み切った 背景には
米騒動の 大衆の無言の圧力が 大きかった

村山　竜平（むらやま・りょうへい）

嘉永3（1850）～昭和8（1933）三重県生まれ。西洋雑貨店を経営していたが、明治12年大阪朝日創業に参加し社主、社長。21年「めざまし新聞」を買収して東京朝日と改題。輪転機を導入、新聞近代化を図り、朝日の基礎を築く。23年衆院議員

長谷川　如是閑（はせがわ・にょぜかん）

明治8（1875）～昭和44（1969） 東京生まれ。本名万次郎。明治41年大阪朝日に入社、「天声人語」欄を担当。白虹事件で退社後、大正8年「我等」を創刊し自由主義の立場で論じた。昭和23年文化勲章

大山　郁夫（おおやま・いくお）

明治13（1880）～昭和30（1955）兵庫県生まれ。大正3年早大教授。6年大阪朝日に入社、白虹事件で退社、9年早大に復帰。昭和5年衆院議員。満州事変後に米国亡命、22年帰国し早大教授。25年参院議員

丸山　幹治（まるやま・かんじ）

明治13（1880）～昭和30（1955）長野県生まれ。大阪朝日で外信畑を歩み、白虹事件で退社後、昭和3年東京日日に招かれ28年までコラム欄「余録」（大阪毎日では「雛」）を執筆。東大教授丸山真男は次男

松本　剛吉（まつもと・ごうきち）

文久2（1862）～昭和4（1929）京都府生まれ。明治37年衆院議員。昭和2年貴族院議員。山県、西園寺と接触し「政治日誌」は大正期の政治裏面史の貴重な資料

西園寺　公望（さいおんじ・きんもち）

嘉永2（1849）～昭和15（1940） 京都生まれ。公家名門の出。明治36年政友会総裁となり39年、44年首相。大正末からは最後の元老として後継首相奏請に当たる

▽政党嫌いの 山県だったが
原の政治手腕は 高く 買っていた
「君とは政党内閣の考えが違うくらいで、
政治上の所見は全く一致している」

●9月29日、純政党内閣の原敬内閣誕生
▽内田康哉外相 陸海相以外は 全て 政友会党員
藩閥 公家出身でなく 爵位も持たず
国民から 選挙で選ばれた 代議士が
首相になったのは 日本では 初めてのこと
▽原は 西園寺に「太く短くやる決心だ。
一大決心を以て断固たる政策を行なう」
▽原がやろうとしたのが シベリア出兵の早期収拾

●ところが陸相は、出兵拡大の張本人・田中義一中将
▽田中は 手の平を返したように 態度を変えた
「日本が生き抜いていくには、この道しかない」
大規模出兵を 主張したのが
ほんの1か月余りで「不得策且つ不必要」
▽田中の立場は マッチ・ポンプ
まだ 兵力増強を考えている 参謀本部
特に 上原総長との対立を 深めることに
▽しかし 田中は 陸軍切っての実力者として
着々と 兵力削減の手を 打っていった
▽まず10月15日 英国が要請してきた
「バイカル湖以西への日本軍派遣」拒否を
閣議決定 これで 拡大に 歯止めをかけ
17日の閣議に 1万3,800人の第1次撤兵を提案
▽軍事費が 国家予算に占める割合は
30%そこそこが 43% 来年は 50%を超しそう

●第1次大戦は大正7年11月11日、ドイツ降伏で終わる
▽チェコ軍は 共同出兵で 連絡がついた
米国は 日本の多過ぎる兵力に 抗議していた
▽田中陸相は 12月18日の閣議で 提案
「治安を保つ守備隊に止めて他は召還し
平時編成に改めてはどうか」原首相も同意
▽政府は25日 米国政府に通報
「残留兵力は非戦闘員を含め総数約2万6千人」
▽原首相の 撤兵への努力は ここから躓く

内田　康哉（うちだ・こうさい）
慶応1(1865)～昭和11(1936) 熊本県生まれ。清国公使、駐米大使を経て明治44年西園寺内閣外相。駐露大使の時、革命で帰国。原・高橋・加藤(友)内閣外相を歴任。昭和6年満鉄総裁。7年斎藤内閣外相となり、満州国承認など強硬策を唱え、「焦土外交」と称された

東京朝日社説（大正7年9月30日）
「特に総理大臣の衆議院議員たるが如きは実に我国に於て破天荒といふべく、新内閣の第一の特色は寧ろ此の点に外ならず」

原敬日記（大正7年9月16日）
「西伯利出兵の事に就ては、田中も其不得策且つ不必要と思惟する事、余と同論なり。…但事実上即ち具体的問題とならば如何なる考案あるやを知るべからず」

田中の変節
田中は、山県を通じて原が次期首相の有力候補と知っていて、陸相ポストを期待して原に擦り寄ったのかも知れない。しかしそれ以上に、もう政党内閣の時代が来ていること、山県の力の衰えを感じて山県から原に乗り換えたのではないだろうか。
この後、政友会入りして首相の座を掴むコースは、この時から田中の頭にあったように思われる。

原敬日記（大正7年10月17日）
「閣議後田中陸相余と内談するに、西伯利方面出兵に関し、其費用本年分として1億の予算あり、到底不足なりとて種々の申出あるも自分は之が増額をなすは得策にあらずと信ずるに因り、寧ろ此額にて支弁し得る様に調節し、之

●参謀本部の傀儡政権工作は、構想通り進まなかった
▽揃えた札は セミョーノフら 3人のコサックと
ホールワット中将(北満州ロシア軍司令官兼東支鉄道長官)
▽ホールワットは「政府を作るなら日本軍の支援」
日本は「兵力が要るなら、まず政府を作れ」
▽コサックは 仲が悪く ホールワットも嫌った

●英仏が担いだのは、ロシア海軍のコルチャーク中将
▽米国に亡命していたが 英国政府に 従軍志願
▽英国は 共同出兵すると
英軍と共に シベリアへ 送り込んだ

オムスク政府樹立(大正7年11月18日)

オムスクには、帝政派もいれば革命派もいる臨時政府が出来ていた。英軍の後押しで陸相になったコルチャークは、クーデターを決行、革命派を逮捕し反革命政権を樹立、最高執政官に就任した。英軍が市内を行進して睨みをきかせ、ジャナン仏軍中将が指揮するチェコ軍も協力した。

▽日本は 最初 コルチャークに 冷淡だった
▽傀儡政権を作りたいのは 東部シベリア
軍事行動の範囲も「バイカル湖から東」

●参謀本部も、オムスク政府がシベリアを代表する政府になりそうだとなると、慌てた
▽浦潮派遣軍司令官に
「オムスク政府と好意的な連絡をとれ」と指令
足場を セミョーノフから コルチャークへ
▽大正8年に入り コルチャーク軍が
ウラル山脈を越え モスクワ(ソビエト政府の首都)に
迫る勢いを見せると 焦りは 強くなった
▽米国でさえ 機関銃 弾薬の 武器援助
連合国の間では「オムスク政府を
正式承認してもよい」の気運が 高まっていた
▽田中陸相は 内田外相と協議
「オムスク政府を援助して、シベリアの秩序回復に当たらせる」4月29日の閣議で 承認された
▽5月16日の閣議は 日本が 進んで承認し
列国に提議すること 特命全権大使に加藤恒忠
が為に召還すべき兵は之を召還する等費用を減ずる方針にて…」

コルチャーク(Alexandr Kolchak)
1875～1920 ロシア海軍中将。黒海艦隊司令長官。若い頃は北氷洋探険、水雷戦術の権威として知られた。革命後、米国に亡命。英仏に担がれ大正7年11月オムスク政府を樹立したが、9年2月処刑

英仏の露骨な軍事干渉

オムスク政府が出来た時は、ドイツが降伏、もう戦う必要はなくなっていた。しかもジャナンがバイカル湖以西の英仏軍総指揮官になり、英軍ノックス少将が補佐するという軍事独裁政権の色彩の強いものだった。ロシアを二分、シベリア共和国を作り社会主義革命を潰してしまう ― それが英仏の狙いだった、と言われても仕方ないだろう。

4月30日の外交調査会で

国民党総理犬養毅は「コルチャークと対立しているセミョーノフはどうするのか」田中は「セミョーノフも、今までの関係に拘らず連合国が支持するオムスク政府に従わせなければならない。万一、反抗するようなことがあれば、それは連合国の計画を妨害するものだから、援助の廃止は勿論、力でねじ伏せることまで考えなければならない」

国益がらみとはいえ、利用する時だけ利用し、具合が悪くなれば切り捨てる。酷薄非情な話だった。

5月17日の外交調査会で

犬養「この承認で従来陸軍が支援してきたセミョーノフの地位はどうなるのか」内田外相「今回の承認問題は、最早シベリアだけの問題ではない。いわば、全ロシアの問題なのだから一部の小さ

●パリ講和会議が開かれ、列国首脳が集まっていた
▽日本の音頭とりで 承認問題が討議され
日英米仏伊五大国は 5月26日
オムスク政府に 8項目を提案 受け入れれば
援助を増やし「承認」が 暗黙の合意に
▽6月8日 オムスク政府が 全面的に受け入れた時
ウラル戦線の形勢は 逆転し
承認どころでは なくなっていた
▽春の雪解けと共に 赤軍の反撃が始まり
コルチャーク軍は 退却を続けていた

●オムスク政府は7月18日、日本に2個師団派遣を要請
▽参謀本部は 1個師団増派を 提議したが
閣議は「バイカル湖から東」の線を守り 拒否
▽コルチャーク軍は 潰走状態となり
10月11日 オムスクを撤退 イルクーツクに退却
▽参謀本部に 再び 増兵論が高まり
閣議は12月27日 イルクーツクに 半個師団派遣

閣議決定

①シベリア情勢に鑑み、必要な場合には浦潮派遣軍から一部隊を派遣する②加藤恒忠大使及び居留民保護が必要な場合にも派遣する③派遣兵力は最小限度とする④派遣部隊は中立を守ること

▽大正9年1月1日 本庄支隊(本庄繁大佐指揮)が
イルクーツクに入ったが 厳正中立を守った
▽失望したコルチャーク軍は 逃亡者続出
1月5日 オムスク政府は 崩壊した

●大国エゴの犠牲
▽コルチャークは 過激派に引き渡され 2月7日処刑
チェコ軍が 輸送の安全を図って 取引
シヤナン中将も 了解してのことだった
▽セミョーノフも 25年後の 昭和20年8月
侵攻ソ連軍により 満州で 銃殺された

●米軍は1月8日、突然「全面撤退」を通告してきた
▽グレーブス司令官は 分散配置に危機感
本国に ウラジオ集結の許可を 求めたが…

な事情に拘っていることは出来ない。この際セミョーノフなどは徹底的に処分する」

田中は「セミョーノフを説得して納得させる」と答え、セミョーノフをコルチャークに従わせ、コルチャークも5月25日、セミョーノフを中将に昇進、ザバイカル州軍務知事兼第6軍団長に任命。

英陸相チャーチルは提案した

6月27日の五大国会議で、「チェコ軍帰国促進のため、軍団を二つに分け、半数は北のアルハンゲリスクから、残り半数はウラジオ経由で帰国させる。チェコ軍撤退で生まれる穴は、日米両軍の派遣で補ってほしい」

仏軍指揮下のチェコ軍は、ウラル戦線で戦い、2月からはオムスクーイルクーツク間のシベリア鉄道警備に当たっていた。その帰国促進を名目に、再び日米両軍を引っ張り出しコルチャーク軍の後ろ盾にする狙い。

日米両国とも、赤軍と衝突の恐れのある危険な話には乗らなかった。

チャーチル(Winston Churchill)
1874～1965 英国の政治家。第1次大戦で陸相など歴任。第2次大戦では首相として強力な統率力を発揮し連合国勝利に貢献。51年再度首相となり55年引退。名文家としても知られ、著書「第二次世界大戦」でノーベル文学賞授賞(昭和28年)

本庄 繁(ほんじょう・しげる)
明治9(1876)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。陸軍大将。シベリア出兵に歩兵第11連隊長(広島)として出征。大正10年~13年張作霖軍事顧問。昭和6年満州事変勃発時の関東軍司令官。8年侍従武官長となり、戦後自決した。遺稿に「本庄日記」

▽米国政府は「全面撤兵」決断の チャンスと見た
駐兵を続けて 過激派との 無益な争いに
巻き込まれれば 国益を損なうだけの 判断
▽米軍撤退は 4月1日 完了した
▽原首相は 田中陸相を呼び
「この機会に、ウラジオと東支鉄道守備兵以外は
撤兵したらどうか」と提案 田中も同意した
▽辺地にまで 分散配置された 日本軍は
パルチザン(労働者、農民などで組織されたゲリラ)との
「戦場のない戦い」に 悩まされていた

●5月には「ニコラエフスクの悲劇」が起きた
▽獄舎の壁には「5月24日午後12時を忘るるな」と
刻み付けてあった 日本人122人虐殺の時間
▽国内は「ロシアを討て」の声で 沸き立った
国民新聞には 石田副領事の遺児 芳子(12歳)の
「敵(かたき)を討って下さい」 国民の涙を誘った
▽築地本願寺の 殉難者追悼会で 大隈重信は
「こんなに泣いたことはない。この上はもう軍事
占領だ。責任ある政府が出来るまで北樺太は勿
論、沿海州も日本で預かっておかねばならぬ」
▽日本軍は 補償と賠償を求め 北樺太を保障占領
▽原首相は 山県を訪ね
「今回の惨事の原因はシベリア各地の分散駐兵
にあるので、ウラジオ以外は撤兵する」
▽山県も「傀儡国家を作るなどは無益」と 同意

●参謀本部は「統帥権」を振りかざし、執拗に撤兵反対

原敬日記(大正9年6月8日)

「田中陸相の内談に、チタ方面よりの撤兵の決定に対し上原参謀総長不服にて辞表を出すなどと騒ぎ出したる様なり。自分の考にては辞するなら辞せしめて之を断行すべしと云ふに付、余は大に之を賛成し廟議の決定に対し所謂軍閥の我儘は之を許すべからず、輿論も亦必ず之を賛成せざるべしと云ひ置けり」

▽田中は 自ら辞表 遺留されて留任といった
手のこんだやり方で 参謀本部をなだめつつ
8月31日 ハルビン以西の全面撤収を 終えた

米国に野心はなかったのか？

臨時政府が出来ると、鉄道援助協定を結び、スティーブンス・ミッション(288人)をシベリアに送り込んだ。スティーブンスはパナマ運河建設の主任技師で、狙いはシベリア鉄道。技術開発を援助し、利権に与ろうとした。

しかしソビエト政権が固まり、利権獲得が難しそうだと見ると素早く見切りをつけ、軍隊、技術団を引き揚げた。この決断が早かった。

尼港事件

樺太対岸のニコラエフスクには440人の日本人居留民がいて、日本軍は大正7年9月9日占領、守備隊300人をを配置した。9年に入ると町は過激派に包囲され停戦協定を結んだが、過激派が乱入、見境なしの市民虐殺が始まった。

再び戦闘が始まり4昼夜の戦闘で隊員は50人ほどに減り、石田虎松副領事夫妻も自決した。旅団司令部の停戦命令が過激派を通じて伝えられ、兵士、民間人全員が投獄された。日本軍救援部隊接近に、アムールに引きずり出し虐殺、死体は川に投げ込まれた。

石田芳子の詩

寒い寒いシベリヤの、ニコラエフスク
三年前の今頃は、あたしもそこに居りました お父様とお母様と、妹の綾ちゃんと お父様もお母様も、綾ちゃんも赤ちゃんも みんな 殺されてしまひました 仲のよかったお友達も 近所に住んでたおばさんも、小父さん達も 誰も彼も みんな殺されてしまひました 敵を討って下さい どうか 敵を討って下さい そして うらみを晴らしてやって下さい もしも 此のうらみが晴れなかったなら 殺された人達は 死んでも死ねないでせう (国民新聞 6月18日付)

▽8月までに 中国 仏伊軍が撤兵
　チェコ軍も 9月2日 全員の引き揚げを完了
▽この時 日本も 全面撤兵に 踏み切っていたら
　感謝されても 非難されることは なかったろう
▽大正10年春 ウラジオ撤兵を 進めようとすると
　参謀本部の 強硬な反対論が 再燃した
▽結局 シベリア撤兵の完了は
　原首相が 暗殺され(大正10年11月4日)
　　高橋是清内閣を経て 加藤友三郎内閣の
　　大正11年10月25日まで かかってしまった
▽チェコ軍引き揚げ後も
　名目なき出兵を 2年以上も 続けてしまった

●英仏の馬鹿踊りに踊らされた日本
▽英仏は 臆面もなく
　駐留を続ける日本を 非難する側に
▽「統帥権」を盾にした 参謀本部の
　軍事上の判断 傀儡政権の野望が
　政治的 外交的判断を 押し退けた結果だった
▽出兵失敗の 最大の責任者は 参謀本部
　その責任を追及し「統帥権」に 政治のワクを
　　はめることが 出来なかったのか？
▽大戦の終了と共に「軍縮の時代」が始まる
▽軍服姿では 町中を歩けないほど
　肩身の狭い思いをした 軍人たちが 昭和に入り
　　政治も 外交も押し退けて 出て来ようとは
　　誰も 思っても いなかったろう

高橋　是清(たかはし・これきよ)
安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の時、日露戦争の外債募集に成功。蔵相を経て大正10年、原暗殺で首相、政友会総裁就任。田中・犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。二・二六事件で暗殺

加藤　友三郎(かとう・ともさぶろう)
文久1(1861)～大正12(1923) 広島県生まれ。海軍大将。日本海海戦の連合艦隊参謀長。次官、第1艦隊長官を経て大正4年大隈内閣海相。ワシントン会議首席全権として海軍軍縮条約締結。11年6月首相となり、在任中死去。元帥追贈